The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Ira Altman, The Concept of Intelligence : A Philosophical Analysis, University Press of America, 1997
Author(s)	池吉, 琢磨
Citation	年報人間科学. 2005, 26, p. 283-288
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25882
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

Ira Altman
The Concept of Intelligence: A Philosophical Analysis

University Press of America, 1997

池吉琢磨

○はじめに

この本で展開されている議論には二つの重要な意義がある。第一に、著者が議論の出発点に選んだのがギルバート・ライルの議論であること、第二に、およそ心をめぐる問題の中で最も解決が困難と思われる問題――知性 intelligence の問題に正面から取り組んでいることである。この本の議論には幾つかの問題点があるが――もっとも、決定的な論証などというものは哲学者の未だ見果てぬ夢であるが――今後の心の哲学に新たな方向性を提示している点は正当に評価されるべきだろう。

この本は四つの章から構成されているが、全体の流れとしては三部構成となっている。大まかに言うと、第一章でライルの知性をめぐる議論を検討・批判し、第二章・三章で著者自身の議論が展開され、第四章で応用の問題に取り組む…といった具合である。以下ではそれぞれの章の論旨を紹介し、はじめに挙げた二つの意義を浮き彫りにしてゆく。

○ライルの知性をめぐる議論の検討（第一章）

ライルが知性について論じたことは疑いないし、その箇所を具体的に示すことも比較的容易である（彼の主著『心の概念』には「知性」と題された章すら存在する）。しかし著者が議論の俎上に乗せ

たのは、『心の概念』全体のプログラムを提示する第二章である。この章は命題的知識 knowing that と実際的知識 knowing how の区別を主題的に論じた箇所であり、ライルの議論の中で最も有名なディスポジション disposition の議論もここで展開されている。恐らく著者は、ライルの議論における知性の位置づけを探る上ではその章に専念するのがベターであると考えたのだろう。

著者によると、ライルは知性がディスポジショナルな概念であると考えているという。ディスポジショナルな報告とは、観察された（或いは観察可能な）事柄や出来事の報告でもなければ観察されていない（或いは観察不可能な）事柄や出来事の報告でもない。それはむしろ、ある人や物が、適切な条件が揃うと一定の状態になったりある特定の変化をしたりする傾向にある、という報告である。そしてディスポジショナルな概念としての「知性」は、更なる副次的区分となる概念――確定的 determinate なディスポジションと、確定可能 determinable なディスポジション――のうちの後者に属している。つまり、理知的だと無条件で想定できるような典型的な動作 performance や活動 activity は存在せず、知性の「本質 essence」のようなものはいかなる意味においても存在し得ない、というのである。結局のところ、知性とは「ある特定の仕方で、或いは特定の手続きに従って」行為する――命題的知識ではなく実際的知識を説明する――能力に他ならない。

この見解に対して、著者はディスポジション概念に焦点を絞り検討を加えてゆく。特に強調されているのは、ライルは知性を表す語を検討する際に動詞的用法と形容詞的用法には注目しているが、副詞的用法は無視している、という点である。知性を表す語には単一の挿話を表現するための動詞がない、従って知性には種的 specific な特徴はなく、知性の本質も存在しない、というのが（著者の指摘するところの）ライルの論点だった。だが正当な根拠を示すことなく副詞的用法を無視しているため、ライルのディスポジション分析は不完全であると言わざるを得ない。

このことを示すために著者が提案したのが、様式設定の style-setting ディスポジションである。このディスポジションはそれ自身の過程や挿話 episodes をもたないが、行為の方法 manner や流儀 fashion をまとめたものである。例えば「論理的な logical」という語は動詞的用法こそもたないが、副詞的用法「論理的に logically」が示している方法や流儀はただ一つに定まるため、確定可能ではなく確定的なディスポジションである。従って、知性を表す語は確定可能なディスポジションであるというライルの主張が常に正しいとは言えなくなり、知性に本質というものは存在しないという主張も疑わしくなる。

更に著者は、知性を実際的知識の一種として捉えるライルの見解を批判する。その際に強調されたのは、ライルが能力 ability と才能 capacity を混同している点である。確かに両者は交換可能な場合もあるが、前者が学習や訓練により習得可能であるのに対し、後者は潜在的能力とでも呼ぶべきものである。そして知性とは、ライルの主張するような理知的な能力や実際的知識などではなく、理知

的な才能である、というのが著者の主張である。

それではライルの議論は退けられるべきなのだろうか——そうではない、と著者は言う。批判されるべきはライルの議論の曖昧さであって、著者の目的はまさにその曖昧さを払拭することにある。ライルは二元論者が主張するような神秘的な過程を否定する一方で、二元論者の言うのと殆ど同程度に神秘的で蓋然的な行為を総括するために、確定可能なディスポジションという表現を用いた。しかし著者は更に踏み込んで、知性という語を適用するための「基準 criteria」を提示することを以下の章で試みている。

○知性の定義をめぐって（第二、三章）

知性についての著者による積極的な議論は第三章において示されているが、第二章ではライル以上の影響力を今もなお持ち続けているウィトゲンシュタインに言及している。

ここで著者が注目するのは、徴候 symptoms と基準 criteria の区別である。この区別に関するウィトゲンシュタインの主張をめぐってはさまざまな議論があるが（但し、本稿ではそれらに触れない）、著者が取り上げるのはR・オルブリットンの解釈である。それによると、ある事物がこれこれである——例えば、ある人が賢明である——と述べるためには、そのように述べるための定義的基準が不可欠であり、そのような基準なしには徴候は存在し得ないという。そして前章で見たライルの議論はむしろこのような見解に近い、と著者は指摘する。J・O・アームソンによると、ライルが概念の多様性——例えば、確定可能なディスポジション——を説明する際に次のような二つの基準を用いているという。

（一）行為の要素 action-content はどれも、その行為が適用されるための十分条件ではありえない。

（二）行為の要素はどれも、その行為が適用されるための必要条件ではありえない。

ここでの行為の要素とは「行為を構成するもの」を意味していて、或いは著者は、これがウィトゲンシュタインの議論における「内的過程 inner process」に対応していると考えたのかも知れない。

行為という語にどの程度の幅を持たせているのかについては議論の余地が残るが、知性の問題に関して言えば、著者はこのような立場を受け入れることはできない。著者にとって、知性の概念は確定的な特徴づけが可能なものでなければならないのである。

そこで著者が取り上げたのがC・S・チハラとJ・A・フォーダーの論文「操作主義と日常言語—ウィトゲンシュタイン批判」である。この論文の目的は「内的過程は外部の基準を必要とする」というウィトゲンシュタインの主張を批判することにあったが、著者はこの議論を通して行為を表す述語と心的状態との間の結合関係を明らかにしようと試みる。チハラとフォーダーは、ウィトゲンシュタインが「心的状態は行為を表す言明に翻訳可能である」とする論理的行動

主義の弱いヴァージョンを採っていると前置きした上で、徴候と基準の二分法を検討する。彼らによると、基準は「言語ゲーム」の規則によって与えられるのに対し、徴候は経験や観察を通して見出されるという。つまり徴候は規則から派生するのではないのである。また、彼らは基準が論理的な必要十分条件であるとするオルブリットンの解釈に反対して、「xはSというタイプの状況におけるyの基準である」という形の特徴付けを採る。ここでのタイプとは、出来事間の相関関係――例えば、脳波と夢の報告との間の関連――をとりまとめる働きをするが、これは定義や文法的規則に基づくものと言うよりも物理理論における法則的な関係に近い。彼らの議論は更に進んで「外的な徴候は内的過程を必要する」という主張に至るが、著者も彼らの路線に従う形で知性をめぐる議論を進めてゆく。

第三章では、知性を反射作用 reflexes、性向 tropisms、本能 instinct、学習 learning、習慣 habit、訓練 training といった概念と比較することで、知性の本性を明らかにしようと試みる。著者によると、知的行為は次のような形で特徴づけられる。

（一）知的行為は以下のような点で反射的（但し、ランダムであったり無意識的であったりするのではなく厳密な）である。
①知的行為は具体的な状況の相違に対して敏感なので、獲得されたルーチンを適切に修正するだろう。
②知的行為は、もし環境が急激に変化すれば全く新しいルーチンを生み出すだろう。

（二）知的行為は、単一で恒常的な目的のために「多様な」ルーチンを示すだろう。

（三）知的行為は学習されたルーチンを新たな状況に伝達することができる（解決の創出）。

（四）知的行為は「洞察に満ちている」。これは通常は「関係の認識」として記述され、（試行と失敗の）学習曲線 learning curve の突然の変化、そして試行と失敗への更なる回帰の欠如が行為の形で表される。

この特徴付けがどこまで有効なのかについては、もちろん議論の余地がある。例えば（四）における「関係の認識」は、ライルが排除しようと試みてきた心的行為を暗に示しているように思われる。これに対する著者の応答はこうである。確かに洞察による報告は、知的であるかどうかを判断される行為に先行している。だが判断されるのは当の行為である以上、その洞察は一般的な意味での知性を示すものではない。（四）で述べられている関係とは、知的行為の可能な結果に言及する「行為の基準」のことなのである。

また、著者は知性の概念と密接に関連する「意志 intention」の問題についても言及している。著者は機械や多くの生物はいかなる仕方によっても意志を持ちえないとするノウウェル・スミスの見解に反対し、次のように論じる。

…だがなぜ動物の知性について問題が存在しなければならないの

か。そのような問題が生じうるのは、単にノウウェル・スミス氏の意志の基準が言語に依存したものだからである。もちろん動物は、意志の言明を我々に示すことはない。ノウウェル・スミス氏は、目的と意図（＝原初的な意味での目的）の間に不当なまでに鋭敏であると考えられるべき区別を設けていて、それが彼を先に引用したような動物と機械の知性に関する結論へと導いていったのである。意志を表す語は非・言語使用者の目的を述べる際よりもむしろ言語使用者の目的を述べる際に用いられている、と述べることは適切だろう。しかしながら、我々が全ての意図や目的について述べているように、意志と目的は区別不可能なのである。（五八頁）

第四章において、著者は「機械は知性をもちうるのか？」という問題を肯定的な立場から論じている。二元論の立場を拒否し、フォーダーらの路線を採る著者にとって、いかなる形であれ意志を人間に固有なものと考えるような議論は決して受け入れられないのだろう。

○機械の心（第四章）

心と機械をめぐる論争が伝統的な心身問題に新たな、そして興味深いアプローチを提供するかも知れない……という言明を目にしたことのある人は少なくないだろう。著者も第四章の冒頭でそのような言明を行い、前章までの議論の成果を踏まえてこの問題に取り組んでいる。その具体的内容を要約する紙面の余裕は既にないが、著者の論点は次の一節によく表れている。

…結局のところ、動物は人間にできることの全てを行なうことを求められてはいないし、我々は動物が知性をもっているかどうかを判断することを求められてはいない。また、我々は全ての人間に対して、他の人間が知性をもっていると考えるために他の人間と自分の才能を比較することを求められてはいない。我々はこれらの違いを程度の違いとして表現する。このアナロジーを厳格に適用すると、機械はあらゆる面で人間に匹敵しないが、動物も同様である、と論じることの出来ない根拠は存在しない。だがこのことは、[機械が知性の]概念の適用基準の幾つかを満足している限り、我々に知性の帰属を撤回することを強制しない。（八四頁）

このような結論は、それ自体はさして珍しいわけではない。だがその結論に至る議論が独特なことは先述の通りであり、このアプローチに対して批判・検討の目を向けることには価値があるだろう。

○おわりに

私は本書に対して、初めに述べたように二つの意義を認めているが、同時に二つの懸念も感じている。

一つは、著者によるライル解釈が極めて限定的なことである。こ

れはライルを取り上げる研究者の多くに共通して言えることだが、彼らはライルの議論があたかも『心の概念』の冒頭の二章に集約されているかのように考えていて、『心の概念』以後の論文については検討どころか言及すらしていないことが多い。例えば著者はライルがディスポジションの副詞的用法に注意を向けていない点を批判しているが、ライルは「副詞的動詞と思考の動詞」という論文の中でこの問題を論じていて、しかもその主張は著者の見解と対立している。だが本書には、この点についての著者の言及は見られない。同様に、著者による（もしくは著者の取り上げた）ウィトゲンシュタイン解釈についても批判的な眼差しを向ける必要があるだろう。

もう一つは、第二章以降で示されたような、ライルの議論とフォーダーらの議論とを整合的に結びつけることが果たして可能なのかという点である。この点を解明するためには、フォーダーらによるウィトゲンシュタイン批判がどの程度的を得ているのか、更にはライルの議論とウィトゲンシュタインの議論はどの程度近しいのかを検討する必要がある。だが私見の範囲でコメントするなら、両者の間を整合づけることには相当な無理があるのではないか。と言うのも、知性の問題の源泉である心身問題に対する基本姿勢が根本的に異なっているからである。著者やフォーダーらは、心身問題は少なくとも解決を目指すべき問題であると考えているのに対して、ウィトゲンシュタインは――そして恐らくはライルも、心身問題という問題設定そのものを拒否するだろうからである。

以上の懸念は先述の二つの意義と対立するものではなく、むしろ同じコインの表と裏の関係にある。そして本書が示した新たな議論の方向性は今後更に発展させてゆく価値がある、と私は考える。